

(4)脳波にてんかん性異常を認め、(5)神経学的に強迫笑いを来す疾患を疑わせるような症状を認めない、という5項目をあげている。本症例はこれらのいずれの条件も満たしている。

これまで文献上、pp に笑い発作を伴った例は18例報告されており、このうち10例に視床下部 Hamartoma が見い出されている。笑い発作の発生機序としては、後部視床下部と側頭葉および前頭葉内側面の線維連絡にその由来を求める意見が多い。本例でも Hamartoma の局在、脳波所見等より、この発生機序が首肯されるものと考えている。

7. 小児痙攣重積症の臨床的検討

佐藤 雅久・石塚 利江 (新潟市民病院)
小田 良彦 (小児科)

てんかん・中枢神経感染症などの既知の基礎疾患に気づかない原因不明の特発性けいれん重積発作15例を、臨床的に検討し、その予後について報告した。けいれん重積の定義は①けいれん状態が1時間以上持続する場合。②個々の発作は短くとも、連続して反復襲来し、発作間けつ期に意識回復を認めず、それが1時間以上続く場合のいずれかとした。

対象は、昭和52年1月より60年11月までの8年10カ月間に当科を受診した15例。男6例、女9例であった。発症年令は、5カ月より7才1カ月で、経過観察期間は、10カ月より9カ年9カ月で平均4年間であった。38°C以上の有熱時けいれん重積のみの児は熱性けいれんとし、無熱時けいれん重積を2回以上生じた例をてんかんとした。又、無熱時けいれん重積が1回のみ2例は、脳波上狭義のてんかん波が出現しておらずてんかんの疑いとした。

その結果、15例中10例(66.7%)が熱性けいれんで、3例(20%)がてんかん、2例(13.3%)がてんかんの疑いであった。

各種因子と予後との関係を検討すると発症年令では、6カ月から3才までに発症した9例中1例のみにてんかん発症をみとめたのみで、この年令群の予後が良好であった。有熱性けいれん重積は11例で、内10例が熱性けいれんであり、無熱性けいれん重積4例中てんかん発症2例、てんかんの疑い2例と比べ、予後が良好であった。発作型では、全身性けいれんが10例中8例が熱性けいれんであり、一側性けいれん5例中2例が熱性けいれんであったのに比べ予後良好であった。けいれん持続時間で

は、3時間以上の例はすべててんかんを発症した。治療では、全て Diazepam の静注か注腸、phenobarbital 筋注で消失している。

重積回数はいずれも1回であった。脳波所見では、熱性けいれん10例中正常例が1例、atypical S & W complex 1例、 θ -burst 1例、spike 1例であった。てんかんの疑い2例は、正常1例、 θ -burst 1例であり、てんかん発症例では spike を2例、S & W complex を1例に認めている。CT 検査は11例に施行され、1例に左側脳室の拡大を認めた。この例はてんかん発症例であり、脳血管造影では異常を指摘されていない。

8. 熱性けいれんにおける spike & wave complex と pseudopetit mal discharge について

東条 恵 (新潟大学小児科)

これまで熱性けいれんでは pseudopetit mal discharge という脳波異常のみられ易いことが知られていた。これに対し、梶谷は熱性けいれんに比較的特有の spike & wave complex (以下 FC-PSW) が存在すると主張している。すなわちこの全般性棘徐波結合の棘波はその前半に見られるのみであり、年令分布は3歳から15歳であり、実際の熱性けいれんの出現より遅れて出現するとしている。この FC-PSW は覚醒、過呼吸でも出現し、pseudopetit mal discharge とは異なると指摘している。

今回、脳波異常を呈する熱性けいれん児72名の脳波について、これらの点について若干検討した。FC-PSW を約半数弱の32人が呈し、年令分布は3歳から12歳に亘っていた。それに比し、pseudopetit mal discharge は4例で、これに似た異常波は6例、FC-PSW と区別できないもの4例を合わせても14例であり少なく、年令分布は9歳以下であって、FC-PSW の年令分布とは異なっていた。また FC-PSW の1/3が、覚醒時、過呼吸時に見られた。これらの事実は FC-PSW と pseudopetit mal discharge が同一の脳波異常ではない可能性を示していると推測された。

また、FC-PSW で drowsy と awake ないし過呼吸時で違いがあるかにつき若干検討を試みた。結果は drowsy では4ないし5Hzの PSW が多いのに比し awake ないし過呼吸では3ないし4Hzが多い傾向がみられた。また awake ないし過呼吸で同期性の良い傾向が見られた。これらの傾向は熱性けいれんに純粋小発

作が合併しやすいことを考えあわせると興味深かった。
しかしながら FC-PSW より純粋小発作の 3Hz PSW
に発展したと思われる例はなかった。

まとめ：以前は pseudopetit mal discharge の中
に FC-PSW は入れられていたと思われるが，形態的
に，また年齢分布の違い，また drowsy のみでないとい
う点からも区別しうるものと推測された。

特 別 講 演

「小児てんかんの自然歴」

九州大学小児科 助教授
黒 川 徹 先生

